

- 1 春の星遊びをせんとや生まれけむ
- 2 摘草や思へど思はぬふりをして
- 3 東風吹けば海を渡りてゆく僧侶
- 4 早春や線引多き父の辞書
- 5 お互ひの髪を切りあふ春休
- 6 清潔な少年の耳春の風
- 7 恋猫やまこと大人といふものは
- 8 桜まふなかに襦袢のはためける
- 9 さんざめく光こぼして桜なり
- 10 眠りても覚めても花のなかに居り
- 11 ほろ酔ひの尻落としけり春の土
- 12 ゆふざくら畳一畳分の距離
- 13 微笑みて鉄腕アトム鳥雲に
- 14 犯人は解つておりぬ春の風邪
- 15 階段を昇る足音黄水仙
- 16 本を読む男の指に春日かな
- 17 人肌に心平らかなる四月
- 18 工場のラジオ体操春の夜
- 19 どこまでも手をひかれゆくおぼろかな
- 20 朧夜や天金の書を抱いて寝む
- 21 ふらここやこぼれ落ちたるもの数多
- 22 けんけんば声重なれり春夕焼
- 23 桜蕊ふる教師一人の昼休み
- 24 葱坊主考えごとのまとまらぬ
- 25 秒針の音清らかに夏に入る
- 26 夏めくやしばらく君を見てをらず
- 27 目瞑ればわんとうるさく青葉鳴る
- 28 薫風やものをわすれてやすらけし
- 29 部屋干しの白シャツ浮かぶ五月闇
- 30 紫陽花の一朶離れて咲きにけり
- 31 庭よぎる祖父の気配や夏暁
- 32 夏暁にパラフィン紙の音響きけり
- 33 子を捨てしブツダに草の茂るなり
- 34 褒めらるることのうれしや天瓜粉
- 35 風吹けば会話途切れぬ夕涼
- 36 恋文を読み返しをる端居かな
- 37 暗がりに音のみしたる花火かな
- 38 手花火のちようど真上に喉仏
- 39 無防備に夜を隔つる網戸かな
- 40 夜濯や詩から無限に遠くあり
- 41 中庸を憎みし頃や百日紅
- 42 夜濯やバビロンまでは何マイル
- 43 虫干やわけへだてなく書を愛す
- 44 糸電話床に転がる夜の秋
- 45 音程のはずれし歌や夜の秋
- 46 秋蛍見るべきほどのことを見しか
- 47 スポーツバッグ抱きて眠れる残暑かな
- 48 電車にて触れあふ膝や秋暑し
- 49 問ふことをためらひにけり吾亦紅
- 50 諦めのどこか明るき桔梗かな

51 歌詠みのあふるる国や赤蜻蛉
52 交はりの淡く終わりにて秋の昼
53 戒名を聞けば遠くに草の花
54 同じ歌うたひつづける秋の空
55 子の歌のあちこち抜けて猫じやらし
56 薄原分ける風のなかに君
57 視界の端君を捉ふや秋桜
58 無口なるつれなき人と花野まで
59 この道をゆけば町まで赤とんぼ
60 あまりにも月の明るく夜の客
61 衣被嘘もひよつこり混ざりある
62 月光を容れて木乃伊となりけり
63 月からの迎えは来ずや姥の山
64 秋の雨電車しづかに進みけり
65 秋晴や病むときも健やかなるときも
66 木犀や音楽室は開け放し
67 木の実落つ未だ世界は未知のもの
68 好きな子をいじめてみたきななかまど
69 玄関に人外のものななかまど
70 木の虚の太初の酒を爛にせよ
71 日月の照らしあふなか鳥渡る
72 跡目争い遠くにありてななかまど
73 神棚を祀る祖母の手ななかまど
74 手の平に鬼灯ひとつ如何にせむ
75 ものごころついてさみしき秋の暮

76 すれちがふガムの匂ひや冬木立
77 冬晴や約束を待つ空眺め
78 胸のうちひそやかに抱く大枯木
79 冬青空胸にしまひてあふれたる
80 何故に空青からむ帰り花
81 舗装されし道ばかりなり冬ざるる
82 山茶花の散り重なるをそのままに
83 透明なビニル傘の先オリオン座
84 マフラーで引き寄せられし人のなか
85 ニベア塗り我が手は冬の匂ひかな
86 蕪煮る愚直に恋をしてみんか
87 酔ひさめて君の足ある炬燵かな
88 憂き人をふりむかせたり雪礫
89 人買ひに買はれゆく日や冬暁
90 人恋ふる顔ある寒の盥かな
91 人恋はばただ静かなる冬暁
92 雪女郎あれは我なりどこへ行く
93 人混みに紛れ寂しき雪女郎
94 本当のことを知りたし竜の玉
95 夜の底で炬燵の音を聞いてをり
96 白障子ひととき繭となりしかな
97 母の手や狐火美しく揺れにけり
98 冬の月離ればなれの主従かな
99 どの人も影柔らかく日脚伸ぶ
100 くるくると言葉遊びや雪降りつむ